

「恩返し」教訓伝える

東松島・阿部さん 語り部デビュー

東北福祉大健康科学部2年の阿部花澄さん(20)は宮城県東松島市で5月、東日本大震災の語り部デビューを果たした。震災後に支援してくれたボランティアらへの「恩返し」の思いを込め、自身の被災体験と今後の教訓を中学生に分かりやすく伝えた。

(せんだい情報部・菅野俊太郎)

5月14日、修学旅行で北海道余市町余市西中の3年生21人が、仙台市青葉区の東北福祉大キャンパスを訪れた。阿部さんは五つの班のうち二つの班に、プレゼンテーションソフトで自作した資料を示しながら当時の状況を説明した。

阿部さんは震災当時5歳で、東松島市野蒜地区の保

育園児だった。園での昼寝中に大きな揺れに襲われ、まとまって旧野蒜小に避難した記憶は残っている。

近所の人の「逃げろ」の声で、さらに北側の山に上がって津波を免れたものの、津波で母(当時37)を亡くした。「幼かったけれども母や自分の古里がなくなつた喪失感のほか、なぜ自分が助かったのか」という疑問が消えずにいた」と葛藤を明かした。



中学生に震災時の様子を語る阿部さん(右)

前を向けるようになったのは、現地に入ってくれたボランティアの存在。「他県の人たちが支援してくれる姿を見て、勇気づけられた」と振り返った。防災について、すぐ逃げることに加え、災害時の家族の避難場所やハザードマップの事前確認、日頃から防災意識を持つ必要性を強調した。

話を聞いた中学3年の女子生徒(15)は「津波に対して、どう逃げたのかや被害状況がよく分かった。防災の正しい理解を家族で深めたいと思った」と言う。

将来的に防災士の資格を取り、患者の気持ちに寄り添える看護師を目指している阿部さん。語り部は大学で取り組む防災教育のボランティア活動の一環で、今後も学内外で続ける予定。

「震災後はたくさんの人に支えられ、支えてもらった感謝の気持ちを持ち続けている。今度は自分が恩返しするつもりで、話を聞く人に合わせて分かりやすい説明を心がけたい」と意気込んだ。

東日本大震災
14年
3ヵ月